

大阪 A・P・S コンソーシアム 介護スキルラボ 介護職技能実習生に対するベトナム講師派遣 報告書

実施日：平成 30 年 12 月 11 日(火)～平成 31 年 1 月 11 日(金) 計 32 日間

実施場所：ベトナム ハノイ ホアンロン教育第二センター

報告日：平成 31 年 2 月 13 日(水)

報告者：社会医療法人 生長会 後迫 英和

1. 目的

- (1) アジア健康構想の一環として、外国人技能実習制度において介護職に関する知識・技能の移転、日本・ベトナム間の人材還流。
- (2) 現地での生活・学生との交流等を通じて、ベトナムの文化・歴史・国民性を知る。

2. 授業内容

(1) 技能実習生の日本語レベルについて

A クラス 7 名 (N3 全員取得済)

授業を進める中で、全体的に日常会話は聞き取りや理解も出来ていた。難しい単語等が出てくると質問があり、言い換えや翻訳を伝えると熱心にノートにメモし、学ぶ意欲は高い。音読については、読み間違いもほとんどなく教科書の文章を読むことが出来ている。また、日本語の話し方について個々に応じて音の高低、アクセントを確認し伝えることで、より良く改善することが出来ていた。

B クラス 5 名 (N3 : 2 名取得、N4 : 3 名取得済)

日常会話は比較的、聞き取りや理解も出来ている。若干、N3、N4 取得状況によっても日本語の理解度は異なるが、A クラス同様、個々に対応することで日本語を上手く話したい、より理解したいという意欲が見られていた。また、理解できない言葉については、すぐに質問したり「もう一度お願いします」等、聴解しようと努力されている。コミュニケーションも自ら図ろうと積極的な様子が伺っていた。

C クラス 10 名 (N4 全員取得済)

授業を進める上で、会話は少しゆっくりと話すことで伝わっていた。介護の言葉や日本語の日常会話の理解が難しい場合は、バイ先生の通訳を介して理解できている。全員 N4 取得し、日本語の会話も以前と比較すると向上している。今後、N3 を目指しているが、音読や聴解に差が見られる為、個々の能力に応じた対応が必要となってくる。

(2) カリキュラムについて (A クラス講義内容・実施状況)

① 総合生活支援技術確認：量・頻度等チェックリストによる記録または報告

入国後講習テキスト・青本を用いて報告・連絡・相談の意義や目的を復習し、理解されていた。初任者研修テキストでは、記録の意義・目的の理解や各記録シートの説明、記録をする上での留意点等現場での例等を挙げながら説明することで理解が深まっていた。

② 生活支援とは何か、社会生活とルール

赤本・青本を用いて復習することで、文化の違い…日本の生活(四季や行事、礼儀礼節等)について、詳しく説明することで理解が深まっていた。また、職場でのルールや仕事をする上での注意事項等も交え、生徒たちの質問にも答えながら不安も軽減されたのではと感じた。

③ 専門性を活かした介護過程の展開

入国後講習テキスト・青本を用いて、初任者研修テキストは補足として使用した。介護過程の目的・意義・展開を教科書に沿って説明した。PDCA サイクルを用いて、事例を挙げイメージしてもらえるように解説することで理解が深まっている。アセスメントに必要な視点である ICF について、構造図にて機能分類の説明を行う。理解は難しいように感じるが、活動面について補足を復習で行うことで理解されていた。介護サービスは、具体的な根拠を持って、行うことが必要であるということや介護を行う専門職としての役割についても説明し、答えてもらうことで理解されていた。

④ 死にゆく人のこころとからだのしくみと終末期介護

青本と初任者研修テキストを用いて、授業を進めた。看護の勉強も行っているため比較的看取りについての理解は早いように思えた。終末期に関する基礎知識や家族への支援、バイタルサインの変化、尊厳死についても復習と生徒に理解しているか確認することまた、私自身の看取りの経験を伝えることで、より知識が深まったのではないかと思う。

⑤ 介護技術(演習)

介護技術の復習では、一連の動作として(仰臥位～体位変換～端座位～移乗・移動)、(ベッド上でのオムツ交換)技能実習評価表を用いて練習する。声掛けにて自立を促すことやコミュニケーションもスムーズに行



えていた。細かな指導は、根拠に基づいて説明することで理解されている。
オムツ交換の際の観察等も声掛けにて出来ており安心感があった。

(B クラス講義内容・実施状況)

① 介護の日本語：事故予防・安全対策、緊急時・事故時の対応

入国後講習テキスト、青本を用いて復習を中心に初任者研修テキストは補足で使用した。理解度を確認した。生活の中でのリスクや事故が発生した際の対応を言葉や内容について質問形式で理解度を深めていった。また、現場で起こりうる事故の例を挙げて説明したり、誤嚥時や心肺蘇生、AED使用方法についてはPCで映像を流して、イメージしてもらい実際、人形を使用し体験することで、知識を身につけることが出来ている。

② 感染症対策に関する知識：適切な手洗い、健康上のリスクへの対応と疾病の予防の為に必要な知識

入国後講習テキストと青本を用いて復習し、初任者研修テキストを確認し実技を行った。日本のように手洗いやうがいの習慣の定着は低い為、感染症対策の基本、感染対策の3原則、感染予防を中心に解りやすく説明し繰り返し復習することで理解されていた。また、実技では手洗いチェッカーを使用することで手洗いの重要性を理解することが出来ている。

③ 総合生活支援技術確認：洗面の介助、座位での上着の着脱の介助 体位変換（仰臥位から側臥位の介助）、起居の介助、車椅子の移動の介助 食事の介助、手浴の介助、足浴の介助、オムツ交換

一つ一つの生活支援技術を復習、確認する。
細かな修正や説明が必要であるが、技能実習評価表を用いて声掛けの指導や繰り返し演習した。自立支援も意識した声掛けや根拠ある支援を示すことで、知識・技術の向上へ繋がったと考える。一連の動作(仰臥位～体位変換～端座位～移乗・移動)になると、声掛けに不安も見られていたが都度、フィードバックすることで、スムーズに介助が出来ていた。
学生は、声かけが不安であると話していたが介助と声かけは同時に行うことが出来ており、より習熟したいという表れであると感じる。



④ 専門性を活かした介護過程の展開

Aクラス同様、入国後講習テキスト・青本を用いて、初任者研修テキストは補足として使用。介護過程の目的・意義・展開を教科書に沿って、PDCAサイクルを用いて事例を挙げ説明した。繰り返し復習することで知識として身につけている。アセスメントに必要な視点であるICFについては、構造図にて機能分類の説明を行う。やはり生徒に確認するも理解は難しいように感じたが、活動面についての補足を復習で行うことで理解されていた。

具体的な根拠を持って、介護サービスを行うことや専門職としての役割についても説明し、口頭にて答えてもらうことで理解が深まっている。

(Cクラス講義内容・実施状況)

① コミュニケーションの目的と方法：コミュニケーションの技法

入国後講習テキスト、青本を用いて復習を中心に初任者研修テキストは補足で使用した。

コミュニケーションの意義・目的・役割について教科書に沿って講義を進めた。情報の伝達については、アイスブレイクを入れ体験することで理解を深めたり、介護の現場におけるコミュニケーション、言語的・非言語的、家族利用者へのコミュニケーションの在り方から

チームでのコミュニケーションでは、介護記録の重要性、記録の5W1Hについても講義で事例を出しながら説明し、根拠を答えてもらうことで理解されていた。



② 介護の日本語：こころのしくみ、からだのしくみ(老化の理解を含む)

入国後講習テキスト、青本を用いて復習を中心に初任者研修テキストは補足で使用した。介護の基本では、人の体、バイタルサインの名称については、看護師中級免許を取得している為、理解度は高い。老化による体の変化、病気と症状についてもその特徴の理解まで日々確認することで、知識の習熟を伺えた。Cクラスについては、前日の学習内容を復習することで理解が深まると考える。

③ 障害の理解

障がい者福祉の基本理念、国際生活機能分類のICFについては、構造図にて機能分類の説明を行う。理解は難しいように感じるが、活動面についての補足を復習で行うことで理解されていた。介護サービスは、具体的な根拠を持って、行うことが必要であるということや介護を行う専門職としての役割についても説明し、答えても

らうことで理解されていた。障害の医学的側面や生活障害についての基礎知識についても障害の名称や意味等についても復習し、確認した。

④ 認知症ケアの視点・認知症の基礎と健康管理

認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活

認知症の人の立場になって物事を考えるという視点や「その人らしい」「寄り添う」とはどういうことか？生徒に問いかけながら授業を進めることで、理解されていた。認知症の主な原因疾患と症状について、復習の際はランダムに問うことで理解度を確認し、答えてもらうことで知識として身についたと感じた。

また、中核症状、行動・心理症状 BPSD については、その行動には意味があり、本人の思いを大切に対応すること、残存能力や意欲向上へ繋げていくことなどを、例を挙げて説明することで理解されていた。一人ひとり価値観やどのような生活背景があるのか等も把握した上で、関わる必要があるという基本的な考え方も理解できていた。

3. 自身の取り組み

(1) 授業の気づきから

- ① 日本語の上達に繋がればと思い、授業前にテーマは自由で、日本語で前に立ってスピーチすることを技能実習生に行ってもらおうと生徒達の柔軟な発想に驚くことが多かったように感じる。スピーチの後の質問では、なぜ？…という意味や理由づけ、根拠を求める質問や前向きな発言へと変化していった。また、ホワイトボードを使用したり、ジェスチャーや聞く側への問いかけ等、プレゼン能力も短期間で向上した。授業の中では、コミュニケーションや日本語の読みかた、だけでなくスピーチの際の学生自身の言葉の引き出しの数や課題の添削でも個々の能力を把握することが出来た。そのことによって、個々に応じたアプローチも授業中、休憩時間、休日での関わりの中で意図的に試みたことで、日本語のコミュニケーション能力の向上も見られた。
- ② ベトナム人の癖である舌打ちに関して、日本とベトナムでの捉え方の違いについて日本では腹が立ったり、イライラ時、ベトナムでは悩んだり、考え事をする時にする。入国前に細かな指摘を行うことで、発表する人、聞く側での気づきの視点も養うことが出来た。
- ③ 日本語の話し方について音の高低、アクセントについて教科書を何行か私が先に読み、その後続けて同じように音・声を出して複唱してもらうことで大幅な改善が見られた。生徒自身の癖を自ら把握することで、日本語の話し方のスキルアップへ繋がったと考える。

- ④ 日本語を読む、聞くという能力は、ある程度理解は出来ていた。しかし、言葉を理解した上で、知識として捉えるには個人差が見られた。文字を書く、言葉として話すということは日本語能力向上に繋がると感じた。Aクラスでは、ホームルーム等を利用して大阪の名所7箇所《大阪城、万博記念公園、USJ、道頓堀、通天閣、あべのハルカス、海遊館》を7名に振り分け、自らどのような場所か調べて、日本語で書いてきてもらい発表するという課題を行ったことでも著しく、成長が見られたと感じる。

(2) 技能実習生の自発性について

授業に対する姿勢など、お互いに規律の面でダメなことを注意し合うということも増えてきた。そのような行動は良いことであると伝えることで、自発的に様々な視野を広げることが出来たように思う。中でもリーダーシップを発揮できるということは有効であり、周りへも良い影響を与えていた。介護に携わるものとして大切な視点を養うことが必要である。また、彼女達の話聞いてみると、人前で話すことによって自信に繋がっていることや講師の意図していることが伝わっていること、日本の文化や歴史を学び、互いの国の文化等の違いを受け入れ建設的な意見も多くなっていたように感じた。

(3) 個々への対応について

教科書を読んだり、会話の中でも個々の癖を指摘することで徐々に改善されていった。ホアンロンのテストで、文法・聴解・会話の点数を確認し個々に合わせた対応も心がけた。特に、復習の際には個々の反応や日本語能力のレベルに応じて繰り返し、読みや聴解、書く、話すことを意識し、個別に答えてもらうことで習熟度も確認しやすく理解度の範囲も把握することが出来た。また、質問する際には、教科書通りの順で復習はせず、順序を変えて質問する等の工夫も必要である。

授業の中でも間違い・失敗を非常に恐れているように思えたので、プライドを傷つけないように間違えても恥ずかしくないことや失敗から学ぶこともたくさんあることを伝えたことで、授業での発言やスピーチにも自信が伺え、復習や予習を自主的にしている様子も見られていた。

4. ベトナムでの生活

(1) ベトナムの歴史、文化、国民性

- ① 1週目にミーディン国立競技場でベトナム×マレーシアの決勝があり、街の至る所では、道を封鎖しサッカーに夢中になる人々で賑わっていた。愛国心が強く、様々な乗り物で国民がパレードを行い、大渋滞であった。国民全体で勝利を祝福し、楽しんでいる様子を肌で感じる事が出来た。また、お祭りが大好きであり、

ホアンロンンの忘年会にもご好意で参加させて頂くことが出来た。皆で楽しんだりお祝いをしたり、何をするにも盛大で豪華な印象であった。

- ② フランスの植民地時代の名残も残っており、建物や食べ物、またクリスマスに関して言えば、ハノイの大教会のノエルの看板(フランス語でクリスマスの季節や歌を意味する)が飾ってあり、クリスマスは教会に行く習慣もあると生徒が教えてくれた。また、宗教的なことでもベトナムのお参りの仕方や日本の基本的な神社の参拝方法についてもお互いの文化を尊重し、理解することに生徒達も積極的に学ぶ姿勢が見られた。
- ③ 大晦日に関して言えば、ベトナムでは、HAPPY NEW YEAR とクリスマスで彩られ、店には、ベトナム国旗を掲げており、バイクの数も故郷に帰る人が多いのか少ないように感じた。街は閑散としており、テトへの準備段階に入っているようであった。テトの方が盛り上がるそうで、この年末年始は、ベトナムでは寝正月になることが多いとのこと。



(2) 現地でサポートして頂いた様々な人達の存在

ホアンロンのアインさん、ハインさん、通訳のバイ先生、日本人講師の方々等、様々な先生方に支えて頂いたことで、現地での生活を楽しく過ごすことが出来た。また、生活する上で、大きな存在であったのは坪忠典氏である。忠典氏の家族にもサポートして頂き、食事や買い物、歴史を感じさせてくれるような場所への案内等、何不自由なく生活がスムーズに出来るようになったことは、技能実習生に対して、日本に入国してからのかかわりや授業を進める上でのヒントを得たように思う。ベトナム語を教えて頂いた際には、日本語を学ぶ生徒達と同じ感覚を実感させて頂いたことや講師に合わせて、より良いものへと物事が運ぶように背中を押してくれる、そのように私自身感じ、学ぶことが出来た。ベトナム生活の中で、講師が不安なく過ごせるのは生徒も含め、現地・日本においても関わる人のあたたかいサポートのおかげだと感じている。この経験を、技能実習生受け入れの際には活かしていきたいと考えている。

5. まとめ

私が派遣された期間は、ABクラスの卒業の時期であり、最終段階に専門職として課題が何であるのか、授業の中で確認しながら見つけ成長へ繋げることが使命である。ホアンロンでは、卒業の際「入国するにあたって」という作文を生徒たちが独自で書いていた。授業後に何名かの添削を行う中で、大阪の名所の課題を行うことに意味があると確信できた。ただ、課題としては介護の専門職としてお題を



「APSを卒業するにあたっての心境」等も最終段階の生徒の気持ちを知る上で、オリジナルな発想での答えも出てくるのではないかと考える。また、現地でベトナムの文化や歴史に触れた講師によって、介護の知識・技術を学ぶということは、他に比べて生徒の習熟度も高いと考える。日本式介護として、技能実習生たちが受け継いだ思い・知識・技術は、最終日のビデオで確認出来たことは大変嬉しいことである。

授業の課題として自分自身の見解であるが、教科書だけではなく映像として視覚からのアプローチが有効であると生徒たちの反応を見て感じたことである。例えば、パワーポイント等で進めることも講師の授業の組み立てや文言、介護技術に関しても統一した内容になるのではと考える。また、次期講師やAPSコアメンバー等に授業の内容や進め方、学校に関する事、生活面全般についてだけではなく生徒の性格や思いについても綿密に申し送り、共有することも必要であると感じた。

もうすぐABクラスが入国する時期となり第2フェーズの体制も整備されていることも生徒たちに伝え、安心感に繋がっている。また、自法人の受け入れ施設においても、介護の専門職として知識・技術の見直しを図っており、技能実習生を受け入れること

で職員のスキルアップ、質の向上を目指している。受け入れ体制を確実なものとなるよう今後、確認していきたい。

最後に、Cクラス、Dクラス、次期の二期生とも交流出来たこと、ABクラスの介護の知識・技術や自己紹介、スピーチ、インタビューなど、生徒たちが成長した姿を見ることが出来たのは、今までの講師達の努力や思いがあったこと、また、大阪APSコンソーシアムを支えてくれた全ての人達のおかげであると感謝の気持ちでいっぱいです。1ヵ月不在の中、自施設を守ってくれた上司、職員の皆様や技能実習生の皆さん、そして大阪APSコンソーシアムの関係者には貴重な経験をさせて頂き、心より厚く御礼申し上げます。